

教師力向上を目指した授業研究の軌跡

知恵を耕し、心を耕す授業づくり
～確かな学力の充実と向上をめざして～

1 はじめに

本校は、創立 38 年目を迎え、生徒数は現在 481 名である。学校教育目標を「生涯にわたる学習の基盤を培い、創造性と国際感覚を身に付けた生徒の育成」と掲げ、目指す生徒像を『ねばり強く学ぶ生徒、心豊かで実践力のある生徒、強い意志で自らを鍛える生徒』として、日々教育実践に取り組んでいる。

生徒は、明るく素直で、部活動にも毎日熱心に励んでいる。また、学習面においては、家庭学習の習慣化など主体的に学習に取り組む態度が身に付けられるよう教師とともに努力しているところである。

さて、これまでの本校における学力向上に向けての課題の 1 つは、取組が学校として組織的なものになっておらず、個々の教師の力量任せの状況が見受けられたことであった。

そこで、生徒の学力向上には「魅力ある授業」づくりを組織的に取り組んでいくことが不可欠であるとし、研究推進部を立ち上げるとともに、平成 21・22 年度に京都府教育委員会から、「教師力向上」教育実践力継承事業の指定を受け、「教師力向上」＝「授業力向上」と位置付け、今まで継続して実践的研究に取り組んできた。

今回、この 4 年間の取組を報告させていただき、今後の更なる教師力向上に生かすべく様々な御指導・御助言を頂ければ幸いです。

2 実践研究の経緯

(1) 平成 21 年度から平成 22 年度まで（2 年間）

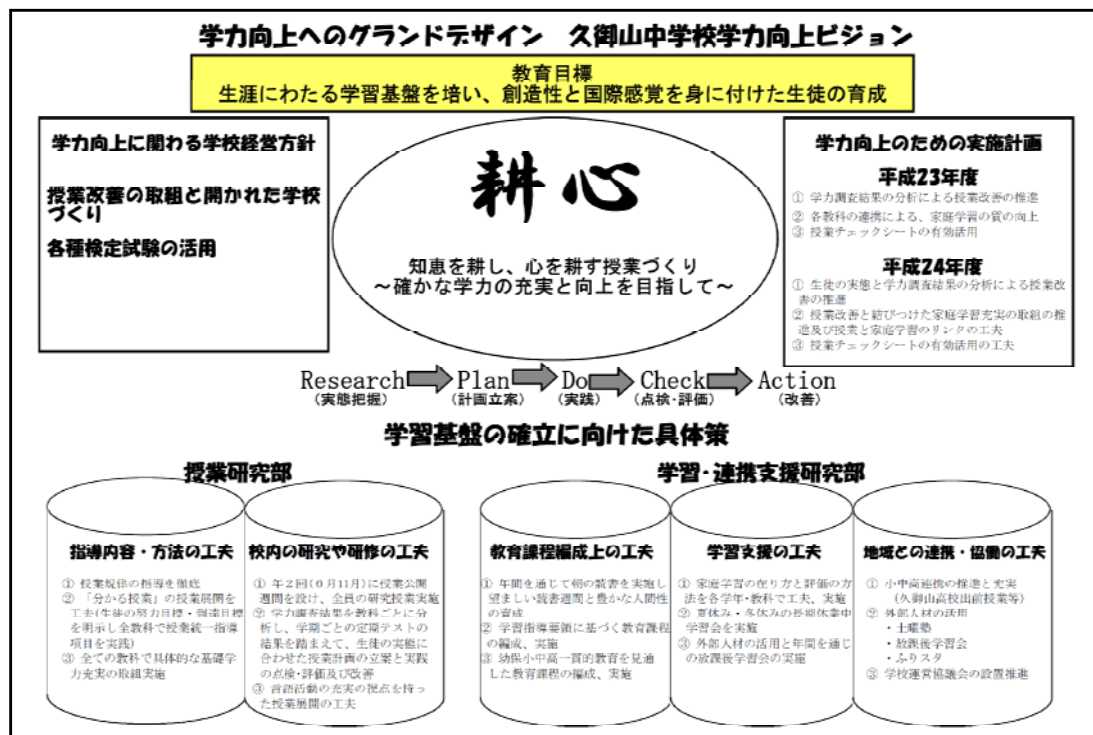
京都府教育委員会から「教師力向上」教育実践力継承事業の指定を受け、指導顧問である大阪教育大学教授木原俊行氏の御指導・御助言を得て、研究実践を推進してきた。

(2) 平成 23 年度から現在まで

2 年間の研究の成果と課題を踏まえ、久御山町教育委員会「教師力向上」調査研究校として研究実践を継続している。

3 研究主題

「耕心」 知恵を耕し、心を耕す授業づくり ～確かな学力の充実と向上をめざして～



4 実践研究の重点

(1) 授業改善プランの利用と研究授業でのチャレンジ

指導者自身の授業改善の取組の振り返りと次のチャレンジにつなげる。

(2) 習得型・活用型授業の工夫

研究テーマによるグループ等、様々な視点で具体的な授業改善の方法について協議を行う。

(3) 授業と家庭学習のリンクの工夫

習得的な内容、活用的な内容を工夫しながら効果的な家庭学習の方法と自学自習の姿勢を身に付けさせる。

(4) 家庭学習の定着・充実に向けた工夫

各学年の家庭学習の取組を交流し合うなかで、効果的な家庭学習の方法をさぐる。

5 実践研究の具体的方策

(1) 平成21年度の取組

ア 組織の構築と学力向上ビジョンの作成

研究を進めていく組織として「研究推進部」を校務分掌に新たに設け、研究テーマや校内研修会の検討を進めることができた。また、教育目標や研究主題を設定し、それに向けた具体策を明確にした学力向上ビジョンを作成した。

イ 教科ごとによる実践報告書と授業改善プランの作成

教科部会を中心に実施報告書を作成し、それをもとに教科ごとに設定した重点テーマに沿った授業改善プランを作成した。

ウ 校内研修や研究授業の実施

授業改善の具体的方策についての校内研修を実施した。また、5教科による研究授業・事後研究会を行い、「授業力向上」に向けて授業改善の取組を進めた。

エ 教師の意識改革

上記の取組を通して、授業改善の取組を年間を通じてやっていかなければならないという意識が生まれた。

平成21年度 久留山中学校学力向上ビジョン実践報告書

授業研究部 ()年()科 報告者()

Research(生徒の実態把握・学力の実態・学習に向かう姿勢の特長など)

Plan(計画:1学期前半(中間テストまで)の具体的な取組)

Do(実践:授業での具体的な計画の実践方法)

Check(点検・評価:中間テストの結果と授業実践の分析→取組の成果と課題)

Action(改善:1学期後半に向けた具体的な改善策)

2学期以降の授業改善プラン

()年()科 報告者()

① 2学期以降の重点目標事項

② 「本時の目標」を生徒に到達する方法

③ 自己評価カードの活用計画の工夫

④ その他

(2) 平成22年度の取組

ア 各自の研究テーマに即した授業改善プランの作成とその形成的評価の工夫

教員自身が自分の取組を振り返り、次のチャレンジにつなげていく取組を構築するため、2年目には次の3点の取組を取り入れた。

- (ア) 授業評価の観点を整理するために授業チェックシートを作成。
- (イ) 共通の重点項目から選択した研究テーマに沿った授業改善プランを作成。
- (ウ) 授業チェックシートから選択した重点評価項目に関する取組を週単位で振り返って次の週の実践に生かす「実践報告書」を作成。

授業チェックシート(習得型)		授業者() 先生	評価者()
項目	○ 改善を要する状況	△ おおむね満足できる状況	A 十分満足できる状況
1 本時のねらいやあてが明確になっている	本時のねらいの提示が不明確であったり、授業展開がねらいと一致していない。	本時のねらいが提示され、ねらいに沿った授業展開がされている。	授業展開中に、生徒が本時のねらいを意識するよう、働きかけをおこなっている。
2 学習規律が徹底されている	私語をしていたり、学習に参加していない態度・生徒に対する指導・援助ができておらず、学習集団に一体感がなっていない。	私語をしたり、学習参加に消極的な生徒に対する指導・援助を適宜行い、概ね教師の意図の下に授業が展開されている。	指導者から当該生徒に対するものだけでなく、生徒同士で、積極的に学習参加するよう、注意し合っている。
3 学ぶ意欲を高めさせる魅力的な授業である	生徒が主体的に学習に参加する場面や興味関心を高める場面や教材提示等がない。	導入場面において、生徒が興味関心を持って教材の提示や展開の工夫が適切に設定されている。	導入のみならず、授業全段に、生徒が興味関心を持って教材の提示や展開の工夫がなされている。
4 家庭学習へのアプローチがされている	本時の学習内容と家庭学習の繋がりが示されていない。	本時に習得した内容を基に、生徒が家庭学習するための課題を提示している。	本時に習得した内容を定着させるための適切な課題と、それらを発展させる課題の両方を、具体的に指示している。
5 ペアワークグループでの活動など、互いに学び合う機会が確保されている	学び合う時間や場が確保されていない。	学び合う時間や場が概ね確保されている。	学び合う場面において、多くの生徒が積極的に交流している。
6 自己評価ツールなどを用いて、本時の学習内容についての振り返りがなされている	本時の学習内容の振り返りをする時間が確保されていない。評価項目がねらいの内容に沿っていない。	振り返りの時間の確保がなされるとともに、本時の学習内容とねらいに沿った評価項目が設定されている。	個々の振り返りがクラス全体の中で共有される機会や仕組みを持っている。
A 習得すべき内容(学習過程の全体)が明確にされ、学習に対する見通しが持てる	本時で習得すべき内容が精選されておらず、単元計画の中での本時の位置付けが不明瞭である。	本時で習得すべき内容が精選され、単元計画の中での本時のねらいが明確である。	単元全体を通して、習得すべき内容が整理され明確化されている。
B 本時の自己評価規程・判断基準が明確であり、自己レベル、Aレベルの両方を明示した上で継続させている	自己評価規程が生徒の立場から不明瞭であり、基準を明確に提示していない。	自己評価規程を明確に提示している。	自己評価規程と判断基準が適切に設定され、生徒が自分にあったレベルに挑戦している。
C 本時で習得すべき学習内容のポイントが分かりやすく解説されている	学習内容のポイントが不明瞭であったり、解説が不十分である。	学習内容のポイントがきちんと解説されている。	学習内容のポイントが適切であり、またそれを伝えるための方法が工夫されている。
D 習得すべき内容をパターン化し、練習する時間が確保されている	習得すべき内容を練習する時間が確保されていない。	習得すべき内容を練習する時間が確保されている。	習得のための練習時間を、授業展開中に効果的に確保している。
E 学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されていない。	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている。	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている上、それをおこなう方法が工夫されている。
F 学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会が確保されている	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会が確保されていない。	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会が確保されている。	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会を設定し、それぞれの学習方法に工夫が見られる。
授業全体を通して参考になった点			
よりよい授業にするために改善が必要な点			

【授業チェックシート】

1学期の授業改善プラン
()科 氏名()

Research
(実態把握: 担当学年に与えられる調査状況と昨年度の実績および各種調査の分析から考えられること)

Check
(点検・評価: 1学期の授業実践の分析→取組の成果と課題)

Plan
(計画立案: 本館をもちえた具体的な授業改善プランと名目で選択した授業チェックシートの評価項目具現化の方策)

項目	記号番号	具現的な内容
共通項目		
活用型授業		
習得型授業		

<具現化の具体的な方策>

<家庭学習とのリンクの方策>

Action(改善: 2学期に向けた具体的な改善策)

選択した評価項目

項目	記号番号	具現的な内容
共通項目		
活用型授業		
習得型授業		

<具現化の具体的な方策>

<家庭学習とのリンクの方策>

Do(実践)
「1学期の授業改善プラン実践報告」

1学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況
()科 氏名

1 選択した評価項目

項目	記号・番号	具現的な内容
共通項目		
活用型授業		
習得型授業		

2 各月毎の進捗状況

	共通項目	活用型・活用型 授業
1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		

【授業改善プラン】

【実践報告書】

イ 公開授業週間を設定し、全員が公開授業を実施

- (ア) 教科の枠を超え、研究テーマのジャンルが同じ教員同士で相互に授業を参観し、授業評価を行う。
- (イ) 重点評価項目を明示した様式で公開授業指導案を作成し、授業チェックシートにより評価項目に沿った授業評価を相互に実施する。
- (ウ) 全ての教員に研究推進の役割を果たしてもらうために、教科の枠を超えたプロジェクトチームを作り、チーム内の教員が授業者（研究授業）への支援と指導助言を行う。

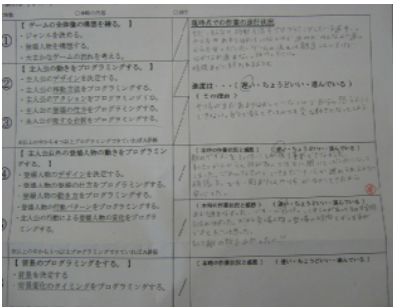
ウ 校内研修会の持ち方の工夫

- (ア) 単なる教科内の実践交流会にとどまらず、授業改善についての新しい実践アイデアが提案できるような校内研修会になるよう、参加型協議、教科単位で協議、学年で協議などさまざまな形態を実施する。
- (イ) 校内研修会の最後に必ず「次なるチャレンジの宣言」を行う。

授業研究・事後研修会を終えて
授業改善へのアプローチ(次なるchallengeへの決意)
教科()氏名()

(3) 平成 23 年度の取組

ア 公開授業週間を設定し、教科の枠を超えたテーマ別グループ研究を実施。(2 学期)

テーマ別グループ研究テーマ		
①授業における I C T の利用  【家庭：イモの皮むき】	②学習の振り返りと学び直しの効果的な方法  【特別支援学級：英語】	③効果的な「自己評価表」の利用  【技術：自己評価表】

○平成23年11月研修会

- ・ 選択したテーマにより、グループ内での意見交流や研修を実施した。



【テーマ別グループ研究分科会】



【全体会：分科会の報告】



【全体会：ブレイン・ストーミングによる授業改善の取組の交流】

イ 家庭学習の定着・充実に向けた工夫

- ・ 家庭学習になかなか取り組めない生徒の実態の分析と各学年の家庭学習の取組の分析から「教師の家庭学習指導力」について考え、「授業改善と結びつけた家庭学習充実の取組」について話し合った。
- ・ 「家庭学習と授業の連動」という視点を入れて、教科ごとに検討した。



- 「家庭での予習を前提とすることで授業への参画意識を高め、生徒の理解力を高める取組」となる意識した授業展開の工夫に取り組む。



【教科別分科会】



【各学年の家庭学習の取組の分析】



【家庭学習の取組分析の報告】

(4) 平成 24 年度の取組

ア 家庭学習の定着・充実に向けた工夫

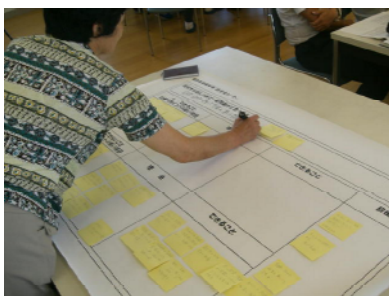
夏季研修会で生徒の学力・勉強に対するモチベーションが上がる「効果的な家庭学習課題と指導のあり方」について話し合った。



- 各学年からの「授業改善と結びつけた家庭学習充実の取組」の報告から「自分化シート」を作成し、課題解決のプロセスを明確にした。

悩みを交換する「自分化シート」

現状を分析してみて一番問題だと思うこと			
＋ できること 比較的ポイントの高い項目	理 由	できること	目 標
－ できること 比較的ポイントの低い項目	理 由	できること	目 標



イ 「ベテラン教師陣によるワークショップ」

夏季研修において、4つのワークショップ担当によるプレゼンテーションを聞き、その後、各自が希望するワークショップに参加した。今年度から本校に勤務した教師や経験年数の少ない教師にとって、2学期の授業に即役立つ内容とあって、興味深い研修となった。

ベテラン教師陣によるワークショップ

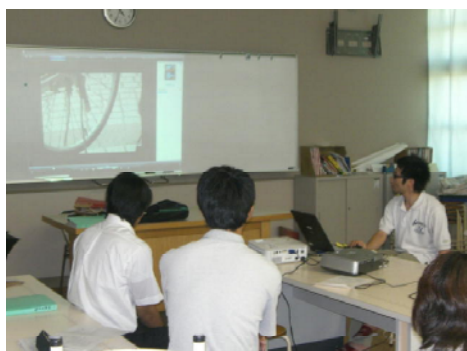
①暗記の極意



②授業に役立つノート作り



③生徒のモチベーションを上げる方法



④おっ！と思われる文章を書く



ウ 現在の取組

(ア) 2学期の研究課題は「活用型授業」

11月の授業公開週間に、全ての教科・全ての教員が「活用型授業」を実施する。授業が習得型に偏りがちになりがちだが、ドリル（習得型課題）と、応用・探究的課題のいずれにも取り組んでいる子どもの学力が最も高いと言われている。そこで、2学期の研究課題を「活用型授業」とし、全ての教科で活用型授業に取り組むこととした。

(イ) 取組の経過

「活用型授業」のとらえ方や授業のアイデアを教科部会および教科の枠を超えたグループで深め、授業公開を行う。

9/26	職員会議（2学期の研究の方向性を確認） 教科部会（授業改善プランについて）
10/3	授業改善プラン提出
10/15	授業改善プラン重点評価項目の実施状況記入（～11/2まで）
10/17	研究推進委員会（相互授業参観グループ別会議の持ち方について）
10/18	授業クラス・相互授業参観グループ決定、学習指導案作成開始
10/23	相互授業参観グループ別会議（取組状況交流）
11/6	学習指導案提出〆切
11/9～14	公開授業週間・相互授業参観開始
11/14	校内研修会

6 成果と課題

(1) 「成果」

ア 研究組織・授業研究システム

- (ア) 校務分掌に「研究推進委員会」を設置し、取組の方向性や校内研修会の在り方について意見を交換しながら研究を進めることができた。
- (イ) 授業チェックシートや授業改善プランを用いた授業研究のシステムを構築・整備することができた。
- (ウ) 学力調査などの分析や授業改善プランや実践報告書については、校内研修会ごとに全教員の分が印刷製本のうえ配布されるので、回を追うごとに内容が充実したものになっている。

イ 教員の意識の変容

- (ア) 研究を一人で進めていくのではなく、同じテーマの教員同士で取り組むことにより、教師の授業改善の意識向上を図ることができた。
- (イ) 教科内や学年内での意見交流が増え、授業改善の方策について教員自身がさまざまな方法を模索するようになった。
- (ウ) 教科の枠を超えたグループによる相互の授業参観の取組により、同じ重点評価項目を選択していても教科の特性による異なったアプローチの方法から学ぶべき点が多かった。

ウ 家庭学習

- (ア) 家庭学習の定着・充実に向けた工夫について各学年・各教科で取組を進めることができた。

(2) 「課題」

ア 研究方法の改善

- (ア) これまでの取組を継続・発展していくために、「テーマ別グループ研究」や「ベテラン教師陣によるワークショップ」などの取組を研究推進部を中心に企画し推進すること。

イ 学力充実における家庭学習のあり方

- (ア) 学力向上と結びつけた家庭学習充実の取組を進めるとともに、学習の基盤となる基本的な生活習慣の確立を図ること。